

愛成学園の僅か2年の歩みで考えた。 僕はきっと、『幸せな施設長だ』。

愛成学園施設長

片山 泰伸

私自身、障害を抱えている人達は施設の中で生活するという事を当たり前のように考え、そしてそれを障害者福祉と把握していた時代が確かにありました。「福祉＝施設」ということに疑問ももつことなく、施設で暮らしている人達と寝食を共にする時間を過ごすことが、福祉といわれる仕事なんだと理解していました。もちろんこれが基本であると思っています。

しかし当時(滋賀県・一麦寮のスタッフでいた)、車で30分ほど離れていたところに信楽の街がありました。まだまだ池田太郎先生がご健在で、時々遊びにいかせていただきました。プラスαの味を教えてくださいました。その味が醸し出すものです。

【人らしさを求めて】という理念の下、メンバーを盛んに街の中に出されていきました。また、【若い人を大切にしなければ】ということで、若いスタッフの試みを大切にされていました。失敗しても何もやらないと失敗はないんだから、それは良い。

今、「グループホーム」という言葉をよく耳にしますが、信楽の街は、池田太郎先生が、今からでいうともう40年以上も前から、民間ホームというものを信楽の街の中に創り、メンバーの街の中での暮らしを支援していました。「彼等を街に出して、街の人達を見せ倒すんだ。」「迷惑を掛け合いながら、関係は創られていくものでもある。」そう話される中で、地域の中で色々な試みをするスタッフを頼もしそうに見守られていました。

その池田先生が亡くなられてから、随分の時間が過ぎました。今でも語り草になっていますが、亡くなられた時に池田先生がもっておられた手帳の中に次のメモが記されていました。彼等には四つの願いがある。(【ノーマリゼーション】そのものです)

1. 働きたい。
2. みんなと一緒に暮らしたい。
3. たくさんの人達と繋がりたい。
4. 無用の存在ではなく、有用な存在でありたい。

以上の四つの願いを支援していくことが我々の仕事である。

新しい学園作りに向かって、この2年間スタッフは、「2000年度作業の在り方報告書」を柱にして、モーレツに突き進んできました。その結果、四つの願いに限り無く近づいた歩みが実感できます。「スマイル祭りへの参加」から、「ハミングバード(施設外地域作業所)の開設」「くりっく(在宅者のサポートセンター)の開設」「トトロのいえ(グループホーム)の開設」「すみれのいえ(生活寮)の開設」「ハワイ旅行」「ホームヘルプ事業の委託」「ガイドヘルプ事業の委託」「サルサガムテープコンサートの開催」「地域行事の定期的な開催参加」「あらゆる人達との出会い」「たくさんのボランティアの方々との来園」「サークル活動の拡がり」「アート事業の展開」等々。多くの事業を僅か2年間で体験する事が出来ました。また、東京都・各福祉事業所・東社協・中野区の方・中野区社協の方・中野ボランティアセンターの方等、行政の方々、そして地域の方々のご理解とご支援にも支えられています。保護者会も新しいものが根付きつつあります。有り難いと思います。

行政、地域の「愛成学園」への視点が変わってきていることを実感いたしますし、それだけに責任を感じます。そして、きっと「幸せな施設長なんだろう。」ということをつけ加えたいと思います。本当に有難うございます。この場をおかりして、「ありがとう」をお伝えしたいと思います。今は、ホームヘルプ事業の拡がりを強く実感しているところです。この事業の展開が地域支援を構築していくものと思われま。

